慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カフカとシオニズム
Sub Title	Franz Kafka und der Zionismus
Author	黒岩, 純一(Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.65- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0339

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカとシオニズム

黒岩純一

序

ユダヤ人としてのカフカについてはこれまでも屢々論じられ，その情報は決して少なくない。カフカと Judentum との出会いは 1911 年，即ちプラハのサヴォイ・ホールで行われたイディッシュ方言による東ユダヤ劇団の芝居を見たときとされる。しかしそれが直ちにカフカの内なる Judenheit を刺戟したわけではない。プラハの解放されたユダヤ人一般に共通する宗教的無関心はカフカ家においても例外ではなかった。約一年の時を経て漸くカフカはイディッシュ語劇を通じて Judentum に接近する。タルムードに熱中し，シオニズム学生団体 Bar Kochba のメンバーであった Hugo Bergmann とシオニズムの問題を討論し，あるいはシオニズム系新聞「自衛」を読むのも 1911 年の末になってからのことであった。Heinrich Graetz の『ユダヤ人の歴史』や M. Pines の『イッディシュ文学史』に熱中するのは 1912 年のことである。

本稿ではカフカの蔵書目録にみられる S. M. Dubnow の『最新ドイツ民族史』，Theodor Herzl の『シオニズム著作集』，あるいはカフカとの関わりの深かったシオニズム系新聞「自衛」等を手がかりとしてカフカと Judentum, 殊にシオニズムとの関係について考えてみたい。ドイツ，オーストリアは西ヨーロッパの Judenheit の二つの中心地であった。従ってユダヤ人問題の歴史もそれだけに永く，複雑であった。

話の順序としてまずシオニズムを生むに至ったドイツ，オーストリアにおける反ユダヤ主義，殊に普仏戦争後の所謂第 2 次リアクションの時代のドイツの反ユダヤ主義，そしてそれとはやや性格を異にするオーストリアの反ユダヤ主義とを概観する。

1　ドイツにおける反ユダヤ主義(1881-1900)

普仏戦争が終り1871年，平和条約が結ばれたとき，その後の50年の政治的運命も同時に方向づけられてしまったことにヨーロッパはまだ気づいていなかった。血なまぐさい暴力が勝利を収めてしまったこの時期は政治的リアクションの時代でもある。それはウィーン会議後の第1次リアクションよりも更に危険であった。その根は民族同士の憎悪の中にあった。二国同盟あるいは三国同盟が締結され，完全武装がすすみ，国家間で互に隙を窺っていた時代である。この時期は軍国主義信仰の全盛期であった。ヨーロッパ諸国が競って軍備拡張，軍事的発明，軍需工場建設に狂奔していた。この軍国主義のいはば実兄にあたるのが帝国主義であり，この時代，列強は競って植民地獲得にのり出した。世界の主導権を握ろうとする戦いは互の憎悪を目覚めさせた。また軍事国家内では主導権を握る民族が他の弱小民族を力で圧倒し，彼らに言語，学校，文化，宗教などにおいて支配民族のそれに倣うよう強要した。こうした国内での戦いに更に階級闘争，労働者と資本家との間の闘争が加わり，激しく利害がぶつかり合った。第2次リアクションのかまどはドイツであった。1870年の勝利はこの民族にとっては毒となって作用した。Treitschke はその著 „Politik“ の中で，それぞれの社会的グループはその個性を国家の個性のために犠牲にすべきであると述べている。この基本路線に沿ってビスマルクの文化闘争(1873-80年)，つまりカトリックのコスモポリタンな力との対決がはじまった。ドイツのリベラリスト(その中にはユダヤ人も含まれる)は教権主義にたいする世俗的原理の勝利としての文化闘争に好意を示した。ユダヤ人は強力な統一国家を目標とするこの鉄のハンマーがやがて自分たちに向って振りおろされることを予見していなかった。すでに1869年，完全な市民権を得ていたユダヤ人は市民的同権が最終的に承認されたと信じ，この新しい国家体制を支えることが愛国的義務であると考えた。永い同化のプロセスはユダヤ人の民族意識を根こそぎ奪っていった。

その頃，つまり1871～73年にかけて普仏戦争後の泡沫会社乱立の時代

が訪れる。賠償金として50億金フランがドイツに流入したことはドイツの金融市場にさそい水を入れたことになった。その結果，戦後5年間に新設された株式会社の総数は875を数えた。なかでも投機熱の著しい産業部門は鉄道企業と重工業であった。この爆発的好景気も間もなく破綻の時を迎える。中産階級の没落が目立ち，その罪はユダヤ人に着せられた。株の取引においてユダヤ人の存在が目立ったからである。この時期，その他の社会的活動でもユダヤ人の急成長が人びとの不満をつのらせていた。弁護士，医者，あるいは大学教授，ジャーナリストたちも新しい競走の不安にとりつかれていた。自由業の世界では反ユダヤ感情がことに強かった。ユダヤ人の解放と産業革命によるユダヤ人の経済的発展が逆に反ユダヤ感情を強める結果となってしまった。軍国主義と偏狭な愛国主義に毒された空気の中に更に新たなユダヤ人憎悪が Antisemitismus という名で登場してきた。この名称は1878年 Wilhelm Marr が著書の中で使用したのが最初とされる[1]。その同じ時期に Adolf Stöcker があらわれてユダヤ人に対する戦いを開始したのも偶然ではなかった。彼は1878年，Christlich-sozial Arbeiterpartei を設立した。その目的は社会民主々義者との戦いであるとされたが，実際には反ユダヤ主義運動であった。やがて党名から Arbeiter の名が消えてしまった。ベルリンや他の都市でも次々に反ユダヤ・グループが生れた。

1879年末，Treitschke が主宰する „Preußische Jahrbücher“ に二つの論文が掲載された。それによると Judentum は疑いもなくドイツにとって危険である。この抗議の声は一つの叫びに融け合っている。つまり「ユダヤ人は我われの不幸である」と。彼は Graetz が『ユダヤ人の歴史』[2] の中でドイツ国内のユダヤ人がユダヤ人として生きる権利を求めたのに対し，それをドイツの中にユダヤの国籍を承認しろという要求であると解釈した。そして反論する。ドイツの国籍の中にユダヤの国籍を承認することはできない。わが国家はユダヤ人に我が同胞と同じように同化する努力を期待して市民的同権を与えた。だが Judentum が国籍の承認を求めるというのであれば権利の基盤は崩壊することになる。そのような欲求を実現す

る方法はただ一つ，移住か外国のどこかにユダヤ国家を建設するしかない。ドイツには二重の国籍を許す場はないと。

ユダヤ問題の悲劇はすべてこの厳しい言葉の中にあらわれている。

しかし最も多弁な反ユダヤ主義イデオローグは哲学者 Dühring であった。彼は親ユダヤの立場の Lessing を文学的に無であると述べるほど病的な，しかし情熱的な思想家であった。彼はユダヤ民族の目的は世界制覇であり，一切の民族からの搾取であると述べてはばからなかった。それ故に国家の差し当っての使命はユダヤ人を国家の構成から，出版界から，学校，経済生活から駆逐してしまうことだと主張する。また血をユダヤ化させないために同化のための結婚は妨げねばならないという。

かくして「ウィーン会議」前後に顕著であった反ユダヤ主義が世紀末になって更に悪化した形でしかもインテンシヴに行われるに至った。前述した Stöcker や Marr の仕事が効果をみせるようになっていた。Stöcker の背後にはまだ比較的穏健な人びとがいたが Marr と彼の「反ユダヤ主義者連盟」の背後には過激な小市民，労働者がいて，彼らは反ユダヤ主義集会に結集し，街頭でユダヤ人を侮辱し，暴力行為におよぶことも稀ではなかった。反ユダヤ集会はしばしば愛国的な挨拶電報を Bismark に送り，好意的な返事を受け取っていた。反ユダヤ主義者の最初の政治的文書は宰相宛の請願書 (1881 年) であった。その愛国的な訴えとは結局次のような反ユダヤ主義的な性質のものであった。

1. ユダヤ人のドイツ流入を制限する。
2. ユダヤ人を責任ある公職から追放する。
3. 小学校のキリスト教的な性格維持のためにキリスト教徒が専ら授業を担当する。
4. 中学，高校の場合，特別な理由がある場合に限り例外扱いとしてユダヤ人教師の授業を許す。
5. ユダヤ人に対する特別統計を再び導入する。

プロイセン政府はこの要求に答えるように憲法の保障する同権をみずから踏みにじっていった。文部大臣 Puttkammer はユダヤ人教師の中学に

おける授業を禁じ，また他の省庁でもユダヤ人を重要な役職にはつけなかった。その後数年して Bismark はロシア系，あるいはポーランド系ユダヤ人を(長期間ドイツにいる場合でも)国外追放するまでになった。

以上がカフカ誕生 (1883年) 前後のドイツにおける反ユダヤ主義の状況である。

次にカフカが所属していたオーストリア＝ハンガリー帝国の場合を概観してみたい。ここは西ヨーロッパの反ユダヤ主義のもう一方の拠点であった。

2 オーストラリア＝ハンガリー帝国における反ユダヤ主義 (1881-1900)

反ユダヤ主義運動を生んだ背景はドイツとオーストリアでは必ずしも一致していない。オーストリアの場合は戦勝に酔うということもなく軍国主義崇拝や国家理念がドイツの場合のように病的に繁茂することもなかった。多民族国家でもあり，統一的な国家ナショナリズムはオーストリアでは不可能であった。ドイツは国内に異質な民族としてポーゼンのポーランド人とユダヤ人をかかえているだけであったから，この二つの民族のドイツ化を国家の原理としてとりあげることも可能であった。ところがオーストリアではドイツ人の他，ボヘミアとメーレンではチェコ人，ガリツィアではポーランド人，ハンガリーではマジャール人が優勢であった。これらの大きな民族はそれぞれ民族的少数派を受け入れ，同化せんと努力していた。このような民族的闘争の只中にあってユダヤ人は民族として公的には否定されていたためそれぞれの民族から同化を求められ，結果的にはそれぞれの敵となってしまった。チェコ人，ポーランド人，ハンガリー人は彼らの領域でユダヤ人がドイツ化し，ドイツ人を優位に導く状況を黙視できなかった。ドイツ人の側は逆にユダヤ人のポーランド化，マジャール化に神経をとがらせていた。ユダヤ人の主たる苦しみはここにあった。

加えて，オーストリアの場合，ユダヤ人内部に文化的，社会的対立があり，それはドイツ国内における対立よりもはるかに厳しかった。ゲルマン化したウィーンのユダヤ人は人種に忠誠を誓ったガリツィアの Chassid

(ハシディズム信奉者)，つまり敬虔なユダヤ教徒と共通するものを何ら持ち合わせておらず，ユダヤ人のなかの極端な貧富の差も目立っていた。一方ではウィーンの銀行家や大商人，他方ではガリツィアの貧民たち，彼らは乞食のようにぼろをまとってウィーンの町へあらわれた。すべてこうした民族的，社会的，経済的闘争が反ユダヤ主義の道を用意した。この反ユダヤ主義はオーストリア＝ハンガリー帝国のそれぞれの領域でそれぞれ特有の性格をもっており，ドイツのプロトタイプとは多くの点で異っている。

1867年，最終的に市民的同権を得たユダヤ人は短時間に社会的階段を昇っていった。インテリの多くは役人，裁判官，教師，教授，あらゆる自由職業，軍隊の中にも進出した。軍隊で士官に出世することもプロセインの場合のように難しくはなかった。大新聞での活躍もベルリンに劣らず目立っていた。地方からウィーンに流入した商人は商業活動や株取引，あるいは泡沫会社において熱病にかかったように活動した。しかしドイツと殆んど時を同じくしておこった恐慌 (1873年) はまたもユダヤ人の責任とされた。それは解放されたユダヤ人の急速な成功に起因する社会的リアクションであった。再び「ユダヤ人の危険」が語られ始めた。80年代の初期，ドイツに反ユダヤ主義の組織が出現したことがオーストリアの反ユダヤ主義者を奮い立たせた。帝国参議院議員であり汎ドイツ主義の指導者でもあった Georg von Schönerer の反ユダヤ主義活動は1882年以降活発化している。永年 Taaffe が先頭にたっていた (1879-93年) オーストリア政府は反ユダヤ運動を煽るようなことはなかった。皇帝 Franz Joseph も常にユダヤ人の市民権を守る決意を表明していた。しかし皇帝のこうした態度も反ユダヤ主義を沈静化することはできなかった。

1884年の帝国議会選挙では自由主義者との激しい戦いの末，何人かの反ユダヤ主義者が議会に送りこまれた。それ以来，その数は確実に増えていった。それは地方議会にも及びウィーン市に隣接するニーダーエスターライヒ州では反ユダヤ主義者が多数派を占めるにいたり，議会の礼儀をも踏みこえる有様であった。この反ユダヤ主義グループの中から Karl Lueger があらわれ，1895年9月，ウィーン市長に選出された。皇帝 Franz Joseph

はこれを拒否し，首相 Badeni は市政は全市民の同権を基盤にして行われなければならないとの声明を発表した。反ユダヤ主義者の間から当然渦のような抗議がまき起こり，数日後，市議会議員の集会はデモンストレーションとして再び Lueger を市長に選出した。ウィーン王宮前では「Lueger 万歳，Badeni を倒せ！」のスローガンが叫ばれた。1896 年 3 月，Lueger は三度び市長に選出された。この時は市の代表と政府の間に外交取引が行われ，Lueger が一時的に市長職を断念し同じ多数派から新たな候補者を出すことが決った。この茶番劇は実際に演出され，反ユダヤ主義の書籍商 Strohbach が選出され，皇帝はこれを承認した。Lueger は副市長となった。事実上は Lueger が市長であり，ウィーン子はこれを洒落て「Strohbach は Lueger の Strohmann (案山子)」とよんだという。1897 年，Lueger は再び市長に選ばれ，今回は無条件で承認された。彼は市政の責任ある仕事をユダヤ人に許さず，ユダヤ人商人に注文を出すことを中止し，ユダヤ人の役人に対して職を辞めるよう仕向けた。市立の学校ではユダヤ人生徒とキリスト教徒の生徒を分離させる方針がとられたが，これだけは政府の力で実現しなかった。

ところでオーストリア (ハンガリーを除く) のユダヤ人口の 3 分の 2 はガリツィアとブコヴィーナに集中しており，1890 年には約 85 万人を数えた。ガリツィアの社会や政治の中心をなしていたのはポーランド人であり，彼らは熱心にルテニア人 (Ukrainer の旧称) 及びユダヤ人のポーランド化を進めていた。ユダヤ人の助けがあってはじめてポーランド人はドイツ人，ルテニア人に対して政治的優位を維持できたからである。従って民族的分離主義に対しては厳しい追求を加えた。こうした基盤の上に 80 年代の初めガリツィアにも反ユダヤ運動がたかまった。

ガリツィアのユダヤ人がポーランド民族主義に苦しんでいたとすれば，ボヘミアのユダヤ人はチェコ民族主義に圧迫されていた。チェコ人はオーストリア＝ハンガリー帝国内でドイツ人，マジャール人に次ぐ第 3 の地位と広範な自治を要求した。少数派ドイツ人はポーランド人がガリツィアのポーランド化を計ったようにチェコのゲルマン化を押し進めた。日常語を

どちらにするかで今やユダヤ人はチェコ人であるかドイツ人であるかを選択しなければならなかった。1880年～1900年にかけてボヘミアには約95,000人のユダヤ人，メーレンには45,000人のユダヤ人がおり，当初これらのユダヤ人は言語，文化面でドイツ人に近く，国勢調査に際して記入された使用言語はドイツ語であった。これがチェコ人の憤激を招いた。しかしドイツ人の反ユダヤ主義が発展して行く過程でユダヤ人はチェコ人との連帯を選ぶようになった。19世紀末にはユダヤ人のほぼ 54% がチェコ語使用と申告している。ただメーレンだけはドイツ系のユダヤ人の優勢(77%) が維持されていた。激しい民族闘争の中でユダヤ人の状況は厳しく，経済的ボイコットが行われ，ユダヤ人が路上で襲われることもあった。反ユダヤ主義問題についてはチェコ人はドイツ人のよき生徒でプラハの教授 Rohling の反ユダヤ・パンフレットがチェコ語に訳されて拡まった。

1897年（カフカ14才の年)，ドイツ人とチェコ人の闘争は頂点に達し，プラハではポログロームが起こり，そのほこ先はドイツ人とドイツ系の名前をもったユダヤ人に向けられた。12月初めチェコ人はドイツ大学の建物，劇場，研究所などを破壊した。商店の破壊はドイツ人，ユダヤ人の区別なしに行われた。ポグロームはプラハから地方都市に及び，ユダヤ会堂やユダヤ人学校が襲撃され，ここでもドイツ人の住んでいないところでは代りにユダヤ人が標的とされたのであった。

言語の平等という面でチェコ人に譲歩した Badeni 内閣はドイツ人の抗議の圧迫のもとに倒れた。

2年後，敵対関係にある筈のドイツ，チェコの反ユダヤ主義者たちは一つの Ritualmord（ユダヤ教の祭式にキリスト教徒の子供の血を必要とするという儀式殺人）をめぐって共同でユダヤ人に対する戦いを進めることになる。

1899年春，チェコの小都市ポルナ近郊の森でチェコ人少女 Agnes Hruga の死体が発見され，容疑者として若いユダヤ人 Leopold Hilsner が逮捕された。殺害の行われた日に何人かの者が未発見の他の2名のユダヤ人と共に彼が森の端にいたのを目撃したというだけの理由であった。犯罪の

動機が確認できないうちに，ドイツ，チェコの反ユダヤ文書はこれが集団的 Ritualmord であると全土に宣伝した。Hilsner は罪を否認し，証拠も不充分であった。クッテンベルクの裁判所は Hilsner が何人かの助けをかりて行った殺人であったとして，1899 年 9 月，絞首刑を言い渡した。裁判所はこの犯罪の宗教的動機については一言も触れていなかった。しかし盲目的な大衆はこのプロパガンダを信じ，反ユダヤ・ポグロームの新たな波が次つぎに波及していった。この時立ち上って反論したのが後のチェコスロヴァキア大統領 Masaryk であった。彼は「ポルナ裁判の上告の必然性」というパンフレットを出し裁判の分析を行ないながら，我われのジャーナリズムの不名誉を償いたいと述べた。つまり 1898 年，99 年世界中の新聞が Dreyfuß 事件の報道に際して紙面をフランスの反ユダヤ主義者たちによる嘘と挑発の記事で満したことを指している。

Hilsner 事件は結局，上告裁判所へ持ちこまれ再び死刑の宣告が下った。皇帝 Franz Joseph のもとに減刑嘆願書が提出され，1901 年恩赦をもって終身刑が確定した。しかしユダヤ人はこの事件に関して示した Masaryk の公平な態度に感激した。その後彼はユダヤ人の同化が真の成功を収めていないと述べてシオニズムを支持した。カフカとも関係の深かった『自衛』紙は 1920 年 3 月 5 日号に „Masaryk und die Juden“ と題する記事を載せてユダヤ人の権利の要求に理解を示してくれた彼に深い感謝の気持をあらわしている。

以上，カフカの誕生直前から政治的シオニズムの生れてくる時点までのオーストリア＝ハンガリー帝国内の反ユダヤ主義運動について概観した。運動の進め方についてはドイツに倣うこともあったが，オーストリアには最初から民族的統一国家をつくる条件が備っていなかったこともあり，ドイツの場合とは質的にかなり違っている。しかし両国が反ユダヤ主義のヨーロッパにおける中心であったことは終始変らなかった。シオニズム運動がウィーンに生れたことは歴史的必然であった。

3 Theodor Herzl とシオニズム運動

ヨーロッパにおける第2次リアクション，つまりユダヤ人迫害の復古は解放されたユダヤ人のイデオロギーを動揺させ，東部ユダヤ人の西方への大移動を招いた。従来の宗教的メシア待望論は19世紀末になると政治的なメシア待望論に姿を変えた。何百年と続いてきた国家への憧れが再び目覚めた。パレスチナに民族の中心をつくりたいという願いが80年代のロシアで浮上した。Lilienblum, Pinsker, Lewanda 等が市民としての解放に絶望し，次の合言葉を発表した。「我われはいたるところで異質の存在である。我われは家へ戻らざるを得ない！」

しかしパレスチナに充分な土地を見出すことができない。そこで新しい民族的イデオロギーの深化とその伝播とが考え出された。つまり文化的，精神的シオニズムである。Diaspora（離散したユダヤ人）にたいする模範としてパレスチナに小さな民族の中心をつくることを目標としたのである。そしてここを中心にして各国に離散している Diaspora の人々の民族的権利を守ろうとする試みである。しかしそれが実際的な活動に移されようとする矢先，西ヨーロッパにユダヤ人国家建設の新たな訴えが響きわたった。政治的シオニズムが前面に押し出されてきたのである。

1891年，ウィーンの新聞 „Neue Freie Presse“ の通信員としてパリへ来た Theodor Herzl は4年間才気あるパリ便りを書き続けた。その頃の彼はヨーロッパの政治の観察者ではあっても参加者ではなかった。その Herzl の政治的態度を一変させるような事件がパリで起きた。Dreyfuß 事件である。この事件が Herzl の心の中にどんな影響を与えたか，彼の後の話にその告白がある。「1894年，パリで見た Dreyfuß 裁判が私をシオニストにした。路上での大衆の怒りの声も忘れがたく耳に残っている。Dreyfuß 事件は単なる誤判以上のものを含んでいる。フランスの多数の人間の願望，つまりこのたった一人のユダヤ人の中に全ユダヤ人を弾劾せんとする願いがこめられている。そこがどこであったか？ 文明化された共和国フランス，人権宣言をして百年にもなるフランスのことであった。」

ドイツ，オーストリアの反ユダヤ主義には慣れていたが革命とユダヤ人解放のいはば故郷であるフランスがこの同じ病に冒されていることがHerzlには大きなショックであった。かくしてHerzlは自分自身の国へ帰還すること，自分の国へ移住すること，これ以外に救いはないと確信するにいたる。ウィーンに帰国した彼はここでもLuegerに率いられた反ユダヤ主義者たちの騒ぎを見出した。1896年，Herzlは„Der Judenstaat"（ユダヤ人国家）を出版しユダヤ人に祖国再建を訴えた。ウィーンでは反ユダヤ主義者Luegerが再び市長に選出されていた。ユダヤ人社会をとらえた絶望感がHerzlの著書の成功に少なからず寄与していたに違いない。しかし同化してしまった資本家や政治家，また彼らに支えられた新聞はHerzlのプロパガンダに敵対的であった。„Neue Freie Presse"すらこのHerzlの活動について言及することはなかった。Herzlは彼と考えを同じくする人たちと共にシオニズム世界会議を召集する準備に入る。会議は1897年8月，ミュンヘンで開催されることが予定されたがこのことが新聞に報道されるやドイツ・ラビ連盟は次のような宣言を公表した。即ちパレスチナにユダヤ人国家を建設するというシオニストたちの努力はJudentumのメシア期待に異議を唱えるものである。Judentumは信者に自分の所属する祖国に献身的に仕え，その国家的関心を全力を尽して促進するよう義務づけているという内容のものであった。開催場所は結局スイスのバーゼルに変更された。

1897年8月末，第1回目の歴史的会議が開催された。永い討議の末，会議はシオニズムの次のようなプログラムを採択した。シオニズムはパレスチナにユダヤ民族のための故郷を建設するために努力する。この目標到達のために会議は次の方法を予定する。

ユダヤ人農民，手工業者，その他の事業関係者をパレスチナに移住させる。ユダヤ人の自意識，民族意識の強化をはかる。シオニズムの目標達成のために必要とされる政府の同意を得るために準備する，などであった。更に「植民地銀行」，「国民基金」の設立についても協議された。

1898年8月末の第2回シオニスト会議では早くもシオニストたちの間

の考え方の違いが明らかになる。その問題点は国家建設を第一に考える極端な政治的シオニストが精神的活動，文化的活動をプログラムから除外したいと考えたのに対し，精神的改革を伴わない民族的，政治的再生はあり得ないとする東方のシオニズムがあったことである。この第2回バーゼル会議は様々なシオニストグループの大幅な妥協の会議となってしまった。つまりこの会議は西方のシオニズムを東方のシオニズムに近づけることになったのである。会議の結論はしかしパレスチナ移住のためトルコ政府の許可をとりつけるためエネルギッシュに活動することを求めていた。パレスチナ獲得のため Herzl はあらゆる外交テクニックを駆使してトルコ政府と交渉を開始した。しかしトルコ政府が態度を明確にしないため交渉は難航する。Herzl はトルコの盟友ドイツの Wilhelm II 世に謁見を許され Sultan への働きかけを依頼した。しかし Wilhelm II 世にはパレスチナをドイツの植民地にしたいという野心があったためこれも失敗に終った。

言葉の外交に頼っていては目標に到達できないと考えた Herzl は財政基盤—植民地銀行—を機能させ財政援助を約束することで勅許状を買い取ろうと考える。彼は Carnegie や南アフリカの植民地開拓者 Cecil Rodes にも助力を依頼するが成功しなかった。1901年末，第5回シオニスト会議が開かれたがこの時になっても Herzl から喜ばしい報告は聞けなかった。

第6回シオニスト会議は1903年8月末，バーゼルで開催された。席上 Herzl からイギリスの植民相 Chamberlain にウガンダ割譲の意志のあることが伝えられた。この会議の直前ロシアのユダヤ人の窮状を視察していた Herzl はその緊急性を考慮してウガンダを一時的な避難場所とすることを提案した。ウガンダがパレスチナの代替地でないことも強調した。しかし論議は沸騰し会議も組織全体も分裂の危機にさらされた。彼は繰返し Baseler Programm（パレスチナ移住を決めた第1回シオニスト会議の決定）を廃棄するものでないことを訴えて分裂の危機を避けることに成功した。だがウガンダ案は挫折した。

この頃，Herzl の最後の力も尽きようとしていた。絶え間ない仕事と緊

張とが彼の健康を危険にさらしていた。激しい心臓発作に見舞われ，病状は日に日に悪化した。1904年7月3日，彼は家族や友人に見守られながら息をひきとった。44歳であった。最後の10年間は同胞のための奉仕に完全に費やされた．Herzl は失意のうちに亡くなった。しかし彼のシオニズムはやがてイスラエル国家建設に結びついたのである。

4　シオニスト・カフカ

カフカが初めて Jizchak Löwy の率いる東ユダヤ劇団の芝居をみたのは1911年10月のことである。その後，1912年1月までに少なくとも14回(恐らく20～30回)イディッシュ語の芝居をみている。イディッシュ語の文学にも興味を示し (T 88), Löwy から詳しい情報を得ている。タルムートに熱中し，シオニズム系新聞「自衛」を読みはじめたのも1911年以降のことであるらしい。カフカの生涯について証言する人たちは1912年～13年にかけて彼が強い関心をもってシオニズムの問題に取り組んだと述べている。先の Löwy との結びつき，またシオニスト系学生組合 Bar-Kochba のメンバーとの接触の後，カフカは友人 Hugo Bergmann と度々シオニズムをめぐる討論を行っている。以下シオニズムに関連する事項を列挙してみる。

1912年1月　Bar-Kochba が主催する民族の夕べに出席。(T 243)
2月　シオニスト集会参加。この席にはシオニズム世界組織の秘書 Kurt Blumenfeld も出席。後にカフカはこの人物と個人的に識り合う。(T 252)
5月　David Trietsch のパレスチナについての講演に出席。(T 279)
9月　パレスチナに移住した弁護士 Dr. Löw と識り合う。(T 289)
1913年9月　第11回シオニスト会議（ウィーン）に出席。(F 462; 465)
12月以前　「ユダヤ公務員協会」のメンバーとなる。(この協会はシオニズムの基盤に立って会員の利益を擁護することを目的とする)
同じ頃(正確には不明)　R. Lichtheim の „Das Programm des Zionismus“ を入手。(W. 528)

この頃カフカの友人 M. Brod がユダヤ民族主義運動の熱心な信奉者となり，シオニズムの思考をとりはじめた[3]のに対しカフカはシオニズムに強い関心をよせながらもつねに距離をおいている。次にこうした証言を挙げてみよう。

1913年1月　Bar-Kochba 主催の講演会で M. Buber が「ユダヤ人の神話」について講演。しかしカフカが出席したのはその後に予定されていた Gertrud Eysoldt の朗読を聞くためであった。(F 252) 同じく1月　Buber のハシィディズムの物語を「堪えがたい」と述べている。(F 260)
2月　シオニズムそのものに無関心。(F 318)
8月　(このような態度が原因して) Brod と一時的に疎遠となる。(カフカに連帯感欠如)
9月　シオニスト会議 (ウィーン) で完全に異質な思いを味わう。(Br 120)
同じく9月　シオニズムに本来的な意味での結びつきが生れない。(F 462)
12月　友人 Bergmann の講演「モーゼと現代」，自分には関係なしと書いている。(T 345)

1913年のカフカにはシオニズムに強い関心を寄せながら，これにどう対応すべきか逡巡している様子がうかがえる。なかなか決断し得ないカフカの性格がここにも出ている。ときに反シオニズムの態度すら感じられる。1922年1月23日の日記はこれまでの自分の生涯を振り返って，自己実現のために様々な試みをしたと数え上げたなかに「反シオニズム，シオニズム，ヘブライ語」(T 560) と記している。最初の単語「反シオニズム」は恐らく1913年のシオニズムにたいする態度を述べたものであろう。いずれにせよカフカ自身，反シオニズムを意識していたことになる。

しかしそれはいつまでも持続するものではなかった。1914年1月23日の日記には「オットラとシオニズム」がなにがしかの「安定感と希望」を与えてくれると書いている。(T 362)　Ottla は「女性シオニスト・クラブ」の会員でもあった。この妹にたいするカフカの影響力は生活全般にわたっ

ており，Ottla のシオニズムにたいする態度も兄の感化とみて差し支えないだろう。

1913年～14年にかけてのカフカのシオニズムにたいする態度の変化については特に顕著な理由はみつからない。ただこの年は第一次大戦の始った年であり，ロシア軍の進撃により反ユダヤ主義を恐れた多数の難民がガリツィアあるいはブコヴィーナから西方へ向って流れプラハにも多数流入している。1914年秋には難民の数が4,000人を超えており，1915年初めにはすでに15,000人のユダヤ人難民がプラハに到着していた。プラハのすべてのユダヤ人グループは協力してこの救済にあたっていた。このような情勢の中でカフカも根深い反ユダヤ感情とユダヤ人の同化の不可能性を思い知らされこれまで以上にシオニズムに接近することになったのではないだろうか。晩年のカフカは同化に拒否反応するまでになっていた。(M 34; 123)

1915年とそれに続く年は H. Binder が指摘するように[4]「自衛」紙にたいするカフカの立場が言及されるべきであろう。1915年9月7日，この紙上に『掟の門』，更に1916年12月には「自衛」の編集長 Kaznelson の編集により „Das jüdische Prag“ が出版される。ここにはカフカの „Ein Traum“ が掲載された。両作品にとってこれが最初の発表の場であった。

1916年7月には婚約者フェリーツェにベルリンの「ユダヤ国民ホーム」でヘルパーとして働くことを勧めている。それにより彼女が精神的に更に近い存在となってくれることをカフカは欲していた。(F 696) このことはシオニズムにたいするカフカの一種の信仰告白とも解釈できよう。カフカの妹 Ottla が1917年，両親の意志に逆ってチューラウで農場経営をはじめたのもシオニズムとの関連でみることができる。この決心はカフカの精神的支えがあってはじめて可能であった。カフカはまた1920年3月，Brod 宛の手紙の中で Ottla がハハシャラ (Hachschra：パレスチナ移住のための農業準備教育) に志願しようとしていること，もしこれが成功したあかつきにはユダヤ国民基金に1000クローネを寄付するつもりであると書いている。(Br. 264) Herzl 等によって設立されたこの「ユダヤ国民基金」は

着々と募金活動をしていた。その成果は「自衛」紙上で発表されたが，1914年2月13日号にはオットラの名がみられ，7クローネの寄付があったと記されている[5]。

当時シオニズムの運動のプログラムは抽象的あるいは精神的活動よりも肉体的な労働に重点をおいていた。それにより根を失ったユダヤ人の生活を救おうとしたのである。Ottla もそれに答えて農業の準備教育に参加したのである。バルフォア宣言以後，急速に成長してくるシャルーズ運動にしてもこうしたシオニズムの要請に応ずるようにして発展した若者の運動であった。シオニズムのイデーの実現をはかるために直接的，具体的な行動をとること，新たな共同体建設のためにアクティヴに参加することを宣言した若い革命的理想主義者たちの活動であった[6]。カフカにはバルフォア宣言のあとパレスチナで製本屋として働く計画が生れている。(Br. 277; 315) 彼はまた医者である若い R. Klopstock や若い女性 M. Eisner にもパレスチナ移住を勧めている。カフカの頭の中ではシャルーズ運動が考えられていたのかも知れない。1917年春にはじまるカフカのヘブライ語学習もシオニズムとの関係で述べられるべきであろう。

カフカの友人 F. Weltsch は彼の同世代の人たちがシオニズムに傾斜していったのは，伝統的な信仰の価値が崩壊して行く過程で生じた空白状態を埋めるためであったと説明している[7]。勿論それは大きな理由ではあったろうが，カフカの場合にはそれ以上の何かがあったように思われる。確かに東ユダヤ劇団の芝居に接し，プラハの西方ユダヤ人の形骸化した Judentum とは全く異質なヴァイタリティー溢れる Judentum を知ったのであった。そこにはまだ宗教上の習慣と歴史との関連が今なお生きていた。そのショックは大きかったに違いない。しかしそれは同時に西ヨーロッパ的教育を受けた人間と東ユダヤ人の文化的距たりを認識することではなかったか。カフカとシオニズムの接点をよく眺めてみるとそこにはある特徴がみてとれる。それはユダヤ人の移住についての強い関心である。友人の間で最も早くパレスチナ移住を決心したのはカフカであったとも言われる。それはシャルーズ運動の思想に近いものであったと思われる。1917年

8月，喀血を経験したカフカは病状の悪化して行くなかで Antisemitismus を逃れて現在をどう生きるかが彼にとっていちばん切実な問題だったのではないだろうか。従って比較的永い時間単位で考えられるべき文化的シオニズムは，たとえ関心はあっても差し当っては目をつぶらなければならない問題であったように思われる。カフカが実際にパレスチナへ行く意図のあったことはすでに最悪の健康状態にあった 1923 年の手紙からも明らかである。(Br. 445 ; 436-38 ; M 205)

日記や手紙の中のシオニズムについての発言を読めば，カフカをシオニストとよぶことは許されよう。ただ組織的なプロパガンダに加ったわけではなく，M. Brod と同じ意味でシオニストとよぶことはできないであろう。

注

1) Wilhelm Marr : Der Sieg des Judentum über das Germanentum 1878
2) H. Graetz : Volkstümliche Geschichte der Juden I-III, Berlin / Wien, 1923
3) M. Brod : Über Franz Kafka, Fischer Bücherei, 1966 S. 100
4) H. Binder : Kafka-Handbuch I Kröner, 1979 S. 503
5) Dvjs. 1967, S. 292 で H. Binder は 2 月 16 日号と書いているが印刷ミスで実際は 2 月 13 日号。
6) Werk und Werden—Eine chaluzische Sammelschrift, Berlin, 1934 S. 37
F. Weltsch : Religion und Humor im Leben und Werk Fraz Kafkas. Berlin-Grune-Wald, 1957. S. 35